

学生の学びと活動を止めない大学の取り組み

(3) 地域貢献・ボランティア活動への対応

聖学院大学

オンラインでの活動方法を模索

ボランティア活動支援センターが取り組むのは、学生の主体性を育むことを主眼に置いた、学生とボランティア団体、地域から届くボランティア募集とのマッチングや、ボランティア団体の立ち上げ支援。丸山氏をはじめとしたボランティアコーディネーターが、学生一人ひとりの興味・関心や問題意識を丁寧に聞き取り、活動先や活動方法を提案する。活動先は、目指す学生が多い社会福祉士や精神保健福祉士、保育士、教員分野に関わるような、保育施設や地域の子育てサロン、高齢者施設、障害者施設から、地元・上尾市のイベントへの出展、被災地復興支援、公民館での子ども達へのダンス指導まで多岐にわたる。



12月に実施したオンラインレクリエーションの様子。保育園とボランティア学生をつなぎ、学生達が考えた遊びを行った。



ボランティア活動支援センター 丸山阿子氏

しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、2020年4月にはマッチング・送り出しとも一時停止することに。「その状況下でできることを模索した」と丸山氏は振り返る。

「まずは学生達がオンライン授業に慣れることが第一でしたが、学生達の

主体性をずっと応援してきた私達としては、これはやっちゃんダメ、あれもやっちゃんダメとネガティブな発信を続けるのは良くないだろうと、コロナ禍でもできることを発信してみる方針に切り替えました」。

そうしてまず5～6月頃に取り組んだのが、Zoomを介したコミュニケーションに慣れることを目的としたオンラインワークショップだった。

「まずは画面を通しての交流の質を高めていけば、何か生まれるだろうと信じて、各ボランティア団体の代表を務めている学生達に声を掛けました。やっているうちに、学生達の覚えの速さや慣れを感じ、学生達が慣れてくれば、地域の様々な方の助けになるのではないかと考えるようになってきたのです」(丸山氏)。

社会福祉協議会と連携し、保育園でのオンラインレクリエーションを実施

そんな中、埼玉県鶴ヶ島市社会福祉協議会から「活動の継続を諦めたくない。市内の保育園で何かできないか」との打診を受け、行ったのが保育園とボランティア学生をZoomをつないでのオンラインレクリエーションだった。丸山氏らの支援のもと「コロナ禍でも何かやりたい」という学生達が「あそび場オンラインプロジェクト」を立ち上げ、オリジナル絵本の読み聞かせや画面越しの「もの当てクイズ」等、レクリエーションの内容を一から考え、8月に実施。保育園からも好評で、11月、12月

毎年、学内に複数のボランティア団体が立ち上がり、大学として審査を経ての助成金支援を行う等、学生のボランティア活動を積極的に後押ししている聖学院大学。ボランティア団体以外にも、毎年のべ300～400名の学生が個人として活動している。コロナ禍において対面での活動を停止せざるを得なくなった中、オンラインでの活動の道を模索し、機会を作り出した聖学院大学の取り組みをボランティア活動支援センター 丸山阿子氏に伺った。



もの当てクイズの様子。学生宅と保育園で同じ野菜のおもちゃを用意。保育士の協力を得てあらかじめ教室内におもちゃを隠し、学生が「これから魔法を掛けてそちに飛ばすから探してね」と声を掛ける→子ども達が見つけて持ってくるという双方向のやりとりを行った。

と継続して実施している。

「ずっとマスクをした大人しか見れていなかったから、画面一杯にマスクなしの笑顔の学生達が映っただけで、『わーっ』と子ども達の歓声が上がりました。できるだけ双方向のやりとりになるよう工夫したことで、1回目で子ども達も学生の顔と名前が一致する状態になり、

学生の声

●実際に保育園に行くことができなくても、こんなに子どもに楽しんでもらえる活動ができるのだと驚きました。オンライン活動の可能性を実感できました。自分が作成したものを発表して子ども達に喜んでもらえることの良さを改めて実感し、人の役に立てることの喜びをととても感じました。(児童学科学生)

●オンラインでの活動は機器的問題や状況把握のしにくさ、やれることの限界等、たくさんの課題がありますが、その分達成感が強く、オンラインでここまでできたという自信につながります。そして、対面での交流がより一層楽しみになります。また、仲間と協力する大切さを学びました。(心理福祉学科学生)

2回目を迎えることができました」(丸山氏)。

準備に当たって課題となったのは、園側、学生側それぞれの通信環境。前者については、市外在住で園への訪問が許されない丸山氏や学生に代わり、鶴ヶ島社協の職員が現地の環境の事前確認や調整、機材設置、接続を担当。また、後者については、使用端末や通信環境の都合で園のモニターに映る映像がワントポ遅れてしまう学生は歌やダンスの際はペープサート(紙人形)を動かす役割を担う、機材トラブルに備えて代わりに台詞を言う人間を事前に決めておく等、「1時間のプログラムを確実に実施するために、かなり細かくシミュレーションした」と丸山氏は振り返る。

今後は高齢者施設等へも展開

この成功を受け、「例えば、昼休みに30分だけ高齢者の方とつないで傾聴ボランティアを行う等、平日に短時間でオンラインでの活動等に大きな可能性を感じています」と、丸山氏は話す。実際、21年に入ってからは、高齢者施設等とオンラインでつないで傾聴ボランティアを行う活動を実現できるよう動いているようだ。

加えて、今後はさらなる活動の模索や、20年春入学の1年生が気軽に参加できる活動・プログラムづくり等に力を入れるという。丸山氏は、「既につながりのある2年生以上の学生とまずはスタートを切った状態だったので、まだ顔が見えていない1年生に対して活動を紹介する機会を少しずつ作り、気軽に相談に来てもらえるようにしたいですね。対面での活動が再開できないからと諦めるのではなく、オンラインで、あるいは、ハイブリッド型で様々な事業を展開していきたいと思います」と話す。ボランティアの新たな形が生まれている。

(文/浅田夕香)